

学生のものとの対話における学びに関する一考察 —色彩教育としての「じぶんのいろかたち」の実践事例を通して—

A Study on Learning in Dialogue with Materials for the Students
in the Early Childhood Education Course
: Through the Color Education Practice of “My colors and shapes”

宮野 周

Amane MIYANO

要旨

本稿は①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による自らの遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に自然素材を活かした保育者の色彩教育に関する新たな教材開発とその実践報告である。具体的には2015年度夏期幼児教育研修会において実施した現職保育者対象の造形ワークショップをもとにしながら、色彩を学ぶことをテーマに考案し保育者をめざす学生の色に関する様々な気づきや主体的な学びを促す「じぶんのいろかたち」の教材開発とその実践した事例から考察を行った。まず、実践のための視点として「まなびほぐし」と阿部雅世が実践する「デザイン体操」について述べた。次に幼児教育学科選択科目「アート教育論」（3年次学生34名）において「じぶんのいろかたち」として①葉の採取・観察・発見、色の分析②本物そっくりに描く、はらぺこあおむしが食べたなら…、描いたものをはさみで切って並べて鑑賞する実践について述べた。考察についてはそれらの活動の過程における学生の様子や発話、感想や気づきを記載するスケッチブックをもとに行った。その結果として①葉の観察・発見、色の分析による色や形の豊富さへの気づき、②自分の色や形に対する気づきや表現を元にした展開・応用の可能性について明らかにすることができた。

I. はじめに

筆者はこれまで「アートと学び」をテーマに、保育者をめざす学生による「土」を用いた絵の具づくりの実践を通して自然素材とのかかわりとアートにおける学びの可能性について考察した¹⁾。その中で集めた土の様々な色に着目し、色比べを行うなど、色彩教育として教材化する必要性や植物など他の

様々な自然素材との対話を促す教材開発の視点と実践を検討することも課題として取り上げた²⁾。

乳幼児期に色彩感覚を育てることについて幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、感性と表現に関する領域「表現」の内容において「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」ことが記され、乳幼児期において色に気付いたり、色を感じたりすることは大切な内容として位置づけられている。

また保育者を対象にした「造形活動と色の意識に関する調査」では、色を使った遊びとして色水あそび、染め紙、マーブリング、にじみ絵などの技法遊びなどの回答があり、保育者自身は色を意識していなくても、実際には色を使った活動が行われているという³⁾。島田は幼児の興味関心や普段の遊びから保育者が準備する材料の色や色数に工夫することでより幼児が色と向き合うきっかけになると指摘している⁴⁾。この調査報告によると領域「表現」においては「色」が大切な視点になっている中で実際に保育者には造形活動において色があまり意識されていないという現状があるのではないだろうか。幼児期と色彩との関係についてはその重要性が主張されつつも現在もお課題であることは先行研究においても指摘がなされている⁵⁾。それと合わせてこれまでのあそびに加えて色を学ぶための新たな色彩教育に関する教材の開発や保育者を対象とした色彩教育が求められているといえるだろう。

本稿はこうした問題意識からこれまでも検討してきた①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による自らの遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に自然素材を活かした色彩教育に関する新たな教材開発を目的に行った実践とその報告である。

具体的には2015年度夏期幼児教育研修会において実施した現職保育者対象の造形ワークショップをもとにしながら、色彩を学ぶことをテーマに考案し学生の色に関する様々な気づきや主体的な学びを促す「じぶんのいろかたち」の実践した事例から考察していくことにする。

II. 実践のための視点

1. ものや他者との関係性から学ぶ「まなびほぐし」と「デザイン体操」

身近なものとの出会いを改めて考えていく上で、佐伯胖が提唱する「まなびほぐし」(アンラーン unlearn) の視点をもつ有効性はすでに述べてきた⁶⁾。「まなびほぐし」とは「まなび (learn)」のやり直しであり「これまでの『まなび』を通して身に付けてしまっている『型』としての『まなびの身体技法 (まなび方)』について、それをあらためて問い直し、『解体』して、組み替えるということを意味」する⁷⁾。それは既成の知識や技能を教員から「教わる」という学び方を解体するものであり、ものや他者との関係性から遊びの感覚とともに組みなおす営みである。実践事例「じぶんのいろかたち」では自然の中にある枝や葉、木の実を自分で採集することから始まり、採集したものを自分なりに観察し、発見し、分析した後「より本物らしく描く」ことが主題である。この主題は「As-Real-As Possible Drawing: できるだけ本物らしく描くこと」という建築家でありデザイナーでもある阿部雅世がデザインを学ぶ学生に実践するデザイン・ワークショップ「デザイン体操: Design Gymnastic A.B.C」などの一連のエクササイズの一つがもとなっている。「デザイン体操: Design Gymnastic A.B.C」とはデザインをする際の発見力と想像力を鍛えるエクササイズである⁸⁾。それらの実践例の中でも「As-Real-As Possible Drawing: できるだけ本物らしく描くこと」は情報を観察し、発見し、分析することと視覚コミュニケーションの感覚を高めることがねらいである。また阿部はこの「デザイン体操」について、物

の見え方が全く変わるものとして「感覚と想像力の筋肉を運動させてストレッチするための、子供でも、大人でも、どこにいてもできるトレーニングメニューのようなものを、創作してみました」と述べており、保育者や子どもを対象にしたワークショップも実践している⁹⁾。この観察して気づいたことや想像したことを表現するプログラムはこれまでの自身の思い込みによって見えているようで実は見えていなかったものやことにあらためて気づいたり、他者ととともに感覚の違いを発見したりといった点で上述した既存の学び方を組み替える「まなびほぐし」の視点にも活かすことができ、実践事例「じぶんのいろかたち」においても有用な視点である。これらの視点は今回の実践計画に先行し、2015年度に幼児教育学科主催の夏期幼児教育研修会において現職保育者を対象に実施した造形ワークショップ「じぶんだけの色」においても活かされており、ワークショップ参加者からは普段見ているものを見つめ直す機会となったことやクレヨンの扱い方の深まりなど成果をあげられたといえるだろう。

2. 「より本物らしく描く」ための造形素材と用具

「まなびほぐし」にもとづく「じぶんのいろかたち」では自然のものでより学生にとってより身近なもの、なおかつ手に入れやすいものとして「葉」を描く対象としている。葉は見慣れすぎていることもあり、実際に手に触れたり細かいところをみたりせず、普段は意識化されにくい造形素材である。しかし「本物らしく描く」ために自分たちが拾ってきた実際の葉っぱを間近に置きながら描くことで「葉」からイメージされる色として学生がもつ一般的な「緑色」「黄緑色」というイメージがどのように変容するかが見取りやすい素材でもある。

また色への意識として色が多彩であることを認識するきっかけや葉の色の微妙な差異を表現するための道具として普段学生が使用しているクレヨン（16色）ではなく、クレヨンよりも混色しやすく発色がよい50色クレパスを描画材料として使用することとした（写真1）。



写真1. 50色クレパス

Ⅲ. 実践「じぶんのいろかたち—より本物らしく描こう—」

1. 実践の目的

色彩教育に関する自然素材を活かした新たな教材の開発を目的として保育者養成において①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による自らの遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」と「デザイン体操」を視座にその有効性について検討するために実践を行った。

2. 実践の方法

実践は幼児教育学科における選択科目「アート教育論」を履修する学生（3年次）34名を対象に2016年5月10日4限、5限に行った（90分2回）。実践の概要や実践の考察はこちらが計画したものを含めて主に学生の授業中の発話や学生が体験後に写真やイラスト、文章でまとめ提出された資料（スケッチブック）をもとに行っていくこととする。

3. 実践の概要

(1) 5月10日(火) 4限：葉の採取・観察・発見、色の分析

①葉の採取

できるだけ身近な素材としての葉を採取するために採取する場としては十文字学園女子大学のキャンパス内や雑木林を選んだ。まず学生は自分の気に入った葉（自分の感覚でよいと思ったもの、目にとまったもの）を雑木林の中を歩いてまわり、30枚以上見つけて集めてくる。自発的に多くの種類の葉を集めるために各自が手作りの新聞紙バッグ（材料・用具：新聞紙、ステープラー）をつくり、その中に採取するようにした。

②葉の観察・発見

拾ってきた葉を画用紙の上に広げて並べる（写真2）。並べたものをルーペを用いてよく観察・発見・分析する（写真3）。

どのような色をしているか、どのような形をしているか、細かな部分まで観察する。

③色の分析：クレパスのどの色と対応するか：葉とクレパスを見比べながら分析する

集めた葉の中から描きたい葉を1枚のみ選び50色のクレパスのうちどの色を使えばその葉の色を表すことができるか、その葉を自分なりにさらによく観察し、葉の色と対応した色を自分で考え選び出す（写真4）。

(2) 5月10日(火) 5限：本物そっくりに描く、はらぺこあおむしが食べたら…、描いたものをはさみで切って並べて鑑賞する

①本物そっくりに描く

虫の「擬態」を絵本等で教員が学生に例示し本物と見間違ふことを意識しながら自分なりの方法（色を重ねたり混ぜ合わせたり、指やティッシュペーパーでこすってみたり）で描く。描く際には細部にわたって葉を観察しながら、分析し選び出したクレパスを使用して描くように心がける（写真5）。完成した葉の絵は各々がはさみで切り取り、描くための見本とした本物の葉と見比べたり、写真に撮ったりしながら鑑賞する。一人ひとりの葉を見比べるだけでなく、クラス全員が描いた葉と本物の葉をそれぞれ対応させた形で置きたい場所に各自が並べ、気づいたことを話し合う（写真6）。



写真2. 採取してきた葉を並べた様子



写真3. ルーペで観察・発見する



写真4. 色の分析と色との対応

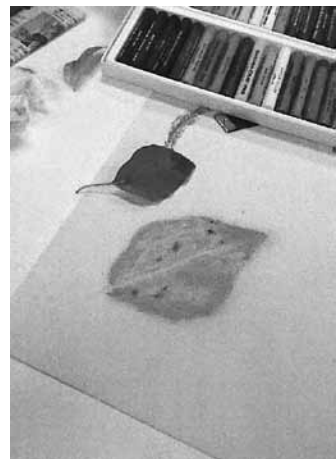


写真5. 自分なりに描いた葉



写真6. 34名の本物の葉を意識して描いた作品と本物の葉を並べた様子

②はらぺこあおむしとその葉を食べたら…

最後に阿部の幼児を対象としたデザイン・ワークショップにおけるカメレオンの実践を紹介しながら、絵本に登場するキャラクターの中で学生にも馴染みのある「はらぺこあおむし」に登場する「あおむし」の物語を紹介し、様々なものを食べていくあおむしに対して、これから描くあおむしは「葉を食べると体の色がその葉の色になってしまう」という物語性を持たせ、自分が描いた葉をあおむしが食べたらどのような色になるか、自分の描いた葉の色をもとにあおむしの色を塗るとい、いわゆるぬりえの形式で描く¹⁰⁾。各々が描いた葉の絵を再度、見つめ直し、自分なりの感覚と解釈であおむしの体につける(写真7)。

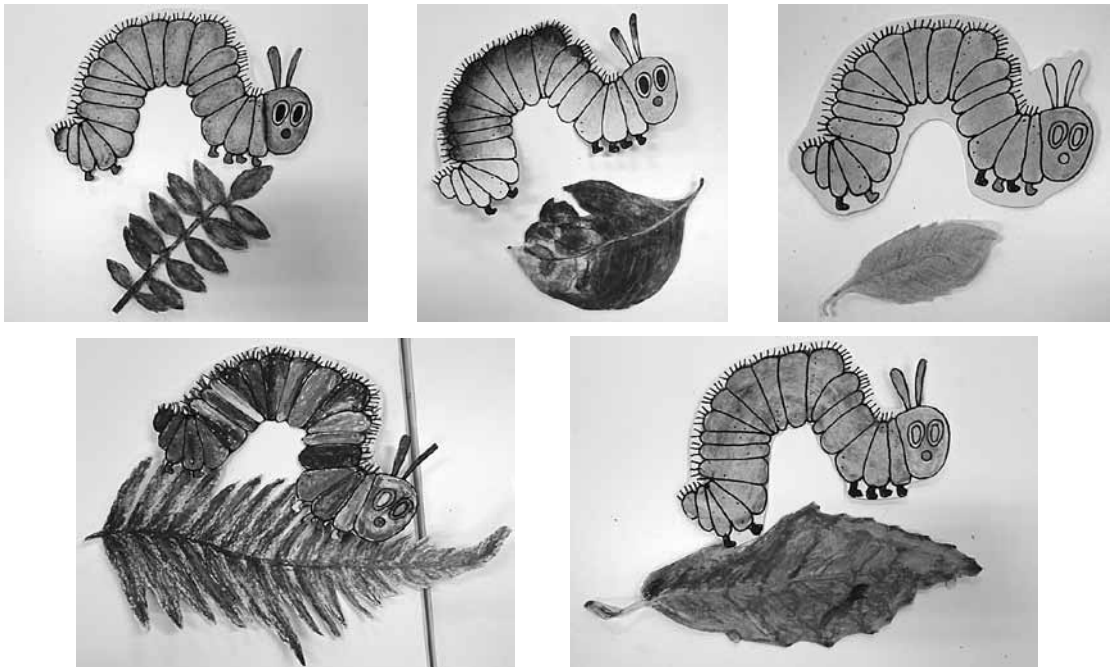


写真7. 学生が描いた葉を食べて体の色が変わったあおむしと葉の一例

4. 実践の結果と考察

(1) 葉の観察・発見、色の分析による色や形の豊かさへの気づき

葉の採取や観察を通して例えば、学生Aは「全部みどりじゃなくて何色も色が集まっているんだなと思った」と感じたことと描く上で「ふにゃふにゃしていて虫くいがあるのを選んだ。色合いもまだらで模様ちっくになっていておもしろいなって」と思い選んだことがまとめからわかる。また色々な色・形の葉を採取した雑木林は雨上がりということもあり、においも晴れている日とは異なっていることに気づくとともに、緑色を意識すると様々な色の葉があることに気づくことができたようだ。その他に葉を選ぶために触り心地（つるつる、ざらざら、ぱりぱり等）も考えて選ぶ学生もみられた。ルーペを使用したことで細かい部分の色の違いに目が向き、緑だと思ってもすべて同じ緑ではないことに気づくことができたと言べる学生もいた。形に関しては「葉の細かい形や葉脈がわかる。まっすぐな所なんてないと気づいた」とまとめる意見もあった。

色の分析では直接、50色のクレパスと本物の葉の色を対応させることで色の豊かさを実感しながら葉は1色できていないわけではない（黄色から黒色まで見つけられた）ことに気づけたようだ。葉の色に合わせてクレパスで薄めの色から濃い色を選んだことでグラデーションになったと気づく学生の様子もみられた。

これらの学生の感じたことや思いからいえることは、あらかじめ準備された素材ではなく、自らが主体的に採取する意識をもって素材を集めることから、自分の好みや興味関心といった感覚を働かせることにつながり、また素材を集めるプロセスや描く際に視覚だけでなく雨上がりの匂いやクレパス自体の匂いに敏感に反応している様子がわかった。さらに50色のクレパスがあることで色の豊かさが視覚化され、緑色においてもこのクレパスにはいくつか種類があるため、自ら悩みながらも観察し、考え、色を対応させて分析するという行為を通して葉の色の豊かさを認識するための手助けとなったと思われる。ルーペがあることも目の前の葉に対して形や色に意識を向けるためのツールとして有効であることがわかった。

(2) 自分の色や形に対する気づきや表現を元にした展開・応用の可能性

葉を観察し、自分の色彩感覚によって様々な色を選び出し描かれた葉は、描き初めは「本物そっくり」をねらいとして進められたが、次第に本物の葉と色を対応させる難しさを感じながら、指やティッシュペーパーでこすって「ほかす」表現やクレパスの重色・混色を繰り返し、次第に本物以上のいきいきしたものが出来上がっていくことに驚く意見がみられた。はじめは描くことに苦手意識があった学生も描くものの隣に本物をおいて分析し描き上げ、最後にはさみで葉の形そのものに切り取ることで、描いているときの画面では出てこなかった葉の影が加わったこともあり、よりその影が描いたものにリアリティを与えることになり、より一層本物らしくなったと気づいた学生もいた。

このように誰かに教えられて得たものではなく、その学生自身が観察・発見・分析し実際に描くことで獲得した形や色をもとにしてまた新たな表現へとつなぐ素材として、絵本『はらぺこあおむし』の「あおむし」に物語性をもたせて塗るというあそびは、学生に色や形の不思議さや豊かさをさらに認識させるものであったといえるだろう。ここではあえて「あおむし」は既成の形が描かれた「ぬりえ」を活用することで葉のときに感じた形の自由さと色の豊かさの意識から形を描くことに苦手意識を持つことなく、さらに色への意識を特化させた教材となったのではないだろうか。また学生Bの「その人にはあの葉っぱはああ見えているんだなと並べてみるとわかった」という感想からいえることはでき上った

た葉・あおむしをお互い鑑賞しあうことでそれぞれ葉の色に対して違う色の捉え方と表現の仕方があることに気づくことができたのではないか。さらに学生のイメージを広げる展開としてこの「あおむし」が蛹になり、蝶になった場合をイメージして描いたり、歩いた跡はどのような道ができるかやどのような糞をするかといったことを想像して描いたりするなど、色と形は物語性を加えることでさらに楽しみながら展開・応用することができるだろう。

IV. まとめと今後の課題

本稿ではこれまで検討してきた①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による自らの遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に自然素材を活かした色彩教育に関する新たな教材としては葉を「本物そっくりに描くこと」とその自分が表現した色や形を元に「あおむし」に色をつける実践「じぶんのいろかたち」をもとにその可能性について考察してきた。

この実践では阿部が実践する自身の感覚と想像力を解きほぐすための「デザイン体操」と遊びの要素を取り入れた「まなびほぐし」としての学びは、自らの感覚や想像力について活動を通して改めて問い直すという点で共通しており、保育者をめざす学生への色彩教育としての新たな教材の可能性を検討する上で有効な視座であることが明らかになった。

学生にとっては色彩の豊かさを表す50色のクレパスが傍らにあることでより色彩の豊かさを意識しながら、身近な自然の素材としての葉に着目し自分なりに観察・発見、色と対応させ分析することを通して自身もつ既製の形や色のイメージや描くことに関してより細かい視点や異なる視点で見つめ直すための「学びほぐし」になったといえるだろう。

今後の課題としては、学生自身が自然の中から感じ取り表現した色をつかってさらに別の自分なりの色・形のイメージを広げて表現できる素材や題材を検討していきたい。

V. 引用文献

- (1) 宮野周『自然体験とアートにおける学びに関する一考察—「土」を用いた絵の具づくりの実践事例を通して—』2013, pp.1-7.
- (2) 同上.
- (3) 島田由紀子「幼児の色彩教育—調査研究を手がかりとして—」『色彩教育』vol.34, NO.1・2 合併号 2015, 日本色彩教育研究会, 2016, pp.6-9.
- (4) 同上.
- (5) 竹井史・山野てるひ「幼児期における色彩知覚の発達について」『美術科教育学』美術科教育学会第11号, 1990, pp.199-215
- (6) 前掲書(1), p.2.
- (7) 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップと学びⅠ まなびを学ぶ』東京大学出版会, 2012, p.62.
- (8) 阿部が幼児や大学生、保育者を対象にデザイン・ワークショップ等で実践する活動の中の一つで、アルファベットや数字を自然のなかに発見し、分析、編集することで、新しいデザインの原動力となる発見力と想像力を鍛え、「そこに存在しながら、誰にも見えていなかった解答」を見つけ出す力を養うための基本エクササイズのこと。

- (9) 阿部雅世「表紙インタビュー」『AXIS 特集デザインはアドレナリン』アクシス出版, vol.139, 2009, p.16
- (10) エリックカールの塗り絵が公式サイトにて無料でダウンロードできる (2017年3月現在)。『The Official Eric Carle Web Site』<http://www.eric-carle.com/coloringpage.html>